

1. 地域漁業と多面的機能：北海道えりも町の事例から

農業の担い手の高齢化や食糧自給率の低下、農村の過疎が進む中で、「農業の多面的機能」が「発見」された。農業や農村が農産物の生産だけでなく、国土の保全、水源涵養、自然環境の保全、景観形成、文化の伝承、保健休養、地域社会の維持、食糧安全保障といった機能を果たしていることが、改めて認識されたのである。農村の多面的機能は、農業の近代化が無視してきた農の機能を発見し、復権させるものといえる。水産物の生産だけではない漁村の多面的機能も、同様に「発見」されるものである。そしてその多面的機能とは、具体的な漁村の営みのなかに現に展開されてきたものであろう。ここでは、北海道えりも町での漁村の持続可能性をめぐる歴史とその自然環境保全機能を中心に据えながら、一漁村にみられる多面的機能を提示していく。

2. えりも町の漁業と自然環境の修復・保全

えりも町の主たる産業は水産業と畜産（馬産地・短角牛飼育）である。えりも町の漁業は、「日高昆布」のブランドになるコンブ漁とサケ・マスの定置網漁業を主軸とするが、豊かな漁場からはタコ、スケトウダラ、カレイ、ハタハタ、シシヤモなど多種多様な魚種が水揚げされている。マツブなどの貝類やマツモなどの海藻類もとれる。

しかし、この豊かな漁場は自然環境の修復・保全の結果でもある。えりも岬では、開拓や緬羊の放牧等で荒廃した山野は禿山と化し、強風による赤土の飛砂で沿岸海域が荒廃、コンブ漁師が漁師を続けることが困難な状況がもたらされた。ここに、えりも治山事業（林野庁）が進められた。漁師が緑化作業を担う形で行われた治山事業は、在地の知恵をヒントに「えりも式緑化工法」を生み出すことで、禿山の緑化と海の再生を可能にした。海の再生はコンブ及び魚介類水揚げ高の飛躍的な上昇という目にみえる形で示された。これは、翻って、漁業を主体とする地域社会の維持・存続のためには、海につながる山野等の自然環境の保全が必要であることを意味する。魚付き林や、「山は海の恋人」（「山は海の恋人、川は仲人」）のキャッチフレーズで各地で展開されている漁師による緑化運動も同様に、漁業の維持が地域社会の維持・存続、国土保全や水源涵養、自然環境の保全等と関連していることを示している。

3. 野生生物との「共生」とその背景

海の再生によりコンブや魚介類のみではなく、ゼニガタアザラシの個体数の増加がみられ、サケ・マス定置網での食害被害が問題になった。天然記念物化への動向がみられたゼニガタアザラシ（＝野生生物）は、漁師の被害受忍と、被害受忍という事実の共有によっ

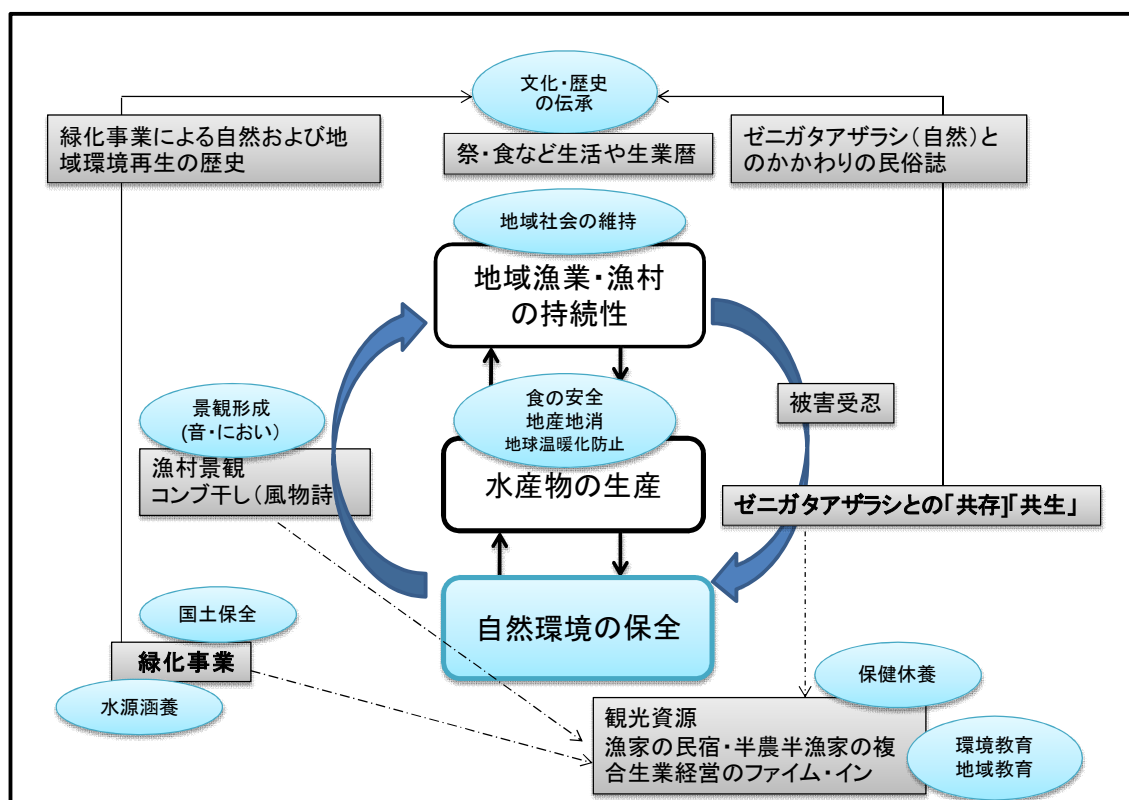
て、「共生」「共存」がはかられてきた。このような被害受忍による共生を可能にしてきたのは、緑化成功による自然環境保全の重要性への認識だけでなく、サケ・マス定置網漁の漁獲高が一定程度の水準に達しているという「実感」があったからである。水産業に被害をもたらす「天敵」との共存は、いわば、漁民の主体的な議論形成や取り組みと、被害を受忍しうる「余力」をもつ地域漁業及び漁村の持続可能性によって可能になったのだ。

ゼニガタアザラシは自然保護だけでなく、地域観光の資源として活用されており、産業としてのエコツーリズムというよりはむしろ、生業複合的な漁家の資源としても一部用いられている。また、環境教育や地域教育のテーマとしても取り上げられている。

備考：2007年の鳥獣保護法（鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律）改正に伴い、ゼニガタアザラシは法対象となり、捕獲等に原則、環境大臣もしくは都道府県知事の許可が必要になったため、ゼニガタアザラシとの共生は漁民の主体性や意識とは切り離された観がある。

4. えりも町における漁業の多面的機能

このように特徴あるえりも町の漁業の多面的機能は以下のように図示できる。こうした多面的機能は、地域漁業および漁村の持続可能性とは不可分ではない。



キーワード：多面的機能、自然環境の保全、地域（地域漁業および漁村）の持続可能性、緑化事業、野生生物との「共生」